

野鳥 会報

No.80 2015年10月発行

日本野鳥の会新潟県

鳥のいる風景 ベニヒワ *Carduelis flammea*



ベニヒワは、ベニマシコやオオマシコなどと共に「赤い鳥」として、愛好者に人気の冬鳥である。

県内にも、毎年渡来しているものと思われるが、渡来数は、年によって変動が大きいようである。昨冬は「当たり年」であり、私のフィールドの上越でも、好物のオオバヤシャブシの実（種子）を食べている20羽位の群れが観察されている。同じ場所で、コベニヒワも数羽観察されている。

疑問に思ったのは、この20羽位の群れの中に、胸の赤い雄（成鳥）が見られないことであつた。雌ばかりの群れかとも思ったが、若い雄（第一回冬羽）

には、頬や胸に僅かに赤味があると聞き、撮った写真を詳細に見ると、程度は多少違っても殆どの個体の頬や胸に僅かに赤味が認められた。図鑑等を見ると、雌にも赤味があるようであり、雄成鳥以外の雌雄の識別は簡単ではないようだ。

ところで、掲載写真（27年3月27日撮影）のベニヒワは、若い雄だろうか、それとも雌だろうか。オオバヤシャブシの実を驚掴みしている勇ましい姿であるが、可愛らしい風貌なので「Boy」ではなく「Lady」であると、自己流識別をしている。

（上越市 金子俊彦）

妙高高原の自然と鳥

～ 世界有数の豪雪地に育まれる生きものたち～

妙高市 長野 康之

妙高高原はかつて上信越高原国立公園の西部地域に含まれていたが、2015年3月27日に分離独立し、妙高戸隠連山国立公園となった。北陸新幹線も開通し、国立公園の入り口となる妙高高原駅までは長野駅や上越妙高駅から30～40分程度で到着する。

新潟県の方にもあまり知られていないが、妙高高原のスキーエリアは世界の人気スキーリゾートランキングで5位に入ったことがあり、近年ではウィンタースポーツを楽しむ外国人が多く訪れるようになってきている。

妙高高原の植生

この世界でも有数の降雪量が独特の進化を遂げた生きものたちを育ててきた。植物ではブナ林の存在が有名であるが、新潟県はブナ林の面積では北海道に次いで全国2位、森林面積に占めるブナ林の割合は全国第3位である。

また、低地からブナ林が成立することも特徴である。ブナ林の林床にはヒメアオキ、オオバクロモジ、エゾユズリハ、ユキツバキ、ハイイヌガヤといった多雪地適応植物と呼ばれる植物が生育し、それぞれ太平洋側に生育しているアオキ、クロモジ、ユズリハ、ヤブツバキ、イヌガヤの変種とされている。

これらの植物に共通する特徴は、背丈が高くな



図2. ハイマツとライチョウ

らず、茎の柔軟性が高いことである。雪に埋もれてしまう事で冬芽が寒さにさらされて死んでしまわないように、また雪の重みで茎が折れないようにといった適応である。

妙高高原の鳥たち

こうしたことと関連してか、妙高高原にはユニークな鳥たちが生息している。妙高高原の麓から火打山へ登っていく道程をたどりながら、いくつかの特徴的な鳥を紹介していきたい。

希少性が高い鳥と言えばノジコである。ノジコは環境省のレッドリストでは準絶滅危惧種となっているが、世界でも繁殖が知られているのが本州中部の山地の河川や湖沼・湿地周辺の林といった特定の環境だけである。あまり注目を浴びない鳥であるが日本でしか繁殖が知られておらず、日本での繁殖環境が悪化して個体数を減らすと世界から絶滅しかねない鳥である。

上越エリアは地すべりが多いことでも知られている。植生遷移が順調に進むと階層構造のある成熟した森林が成立するが、地すべりによって植生遷移の進行が妨げられ、雪の恵みによる豊富な水が湿地等を形成することでノジコの好適な開けた疎林という生育環境が作り出されているのではと思われる。



図1. 火打山のライチョウ (5月)



図3. 7月の火打山・焼山 高谷池

少し標高を上げていくと、林床をササに覆われたブナ林内で多くのクロジのさえずりが聞こえてくる。このクロジも分布がカムチャツカからサハリン、そして日本にかけた極東に限られ、日本国内でも中部以北の落葉広葉樹林でのみ繁殖する鳥である。

ブナ林を歩いているとあちらこちらから声が聞こえてくる妙高高原に多い鳥と言える。黒い鳥というとすぐにカラスが思い出されるが、小さく丸い体型とさえずりがカラスとは違って美しい。

カラ類やキツツキ類をはじめ、センダイムシクイやメボソムシクイ、ルリビタキのさえずりを聞きながら山を登っていくと、オオシラビソを主とした亜高山帯針葉樹林帯になり、そこではククイ

タダキのさえずりの大合唱に遭遇できる。

火打山の高山帯に入ると、これも日本固有種であるカヤクグリが多く出迎えてくれる。近縁種のヨーロッパカヤクグリはユニークな配偶システムを持っていることで知られているが、兄弟で共通のなわばりを守っているようなところを何度も目撃するので、日本のカヤクグリも同じような婚姻形態を持っているのだろう。

火打山のライチョウ

さて、いよいよ高山帯の稜線に入ってくると日本最北限・最少の集団である火打山のライチョウに出会える。といっても5月から6月の残雪が残るなわばり形成期と10月になって群れを作り始める時期以外は、ハイマツやミヤマハンノキといった樹木の群落や、高茎草本群落の中に隠れてなかなか見ることができない。

火打山のライチョウは、2007年から国際自然環境アウトドア専門学校が継続して調査をしているが、近年とても心配な状況が明らかとなっている。ここ4年ほどの間に個体数が減少し続けているのである。2012年には31羽確認されていたものが、2013年には25羽、2014年には17羽、そして今年(2015年)は13羽の確認に留まった。この個体数減少の原因はまったく不明で、彼らの



図4. 火打山のライチョウのペア



図 5. 厳冬期のライチョウ



図 6. 火打山のライチョウの群れ

保全のためにも減少要因解明のために調査が必要である。

日本のライチョウは2012年8月に環境省版レッドリストの見直しで絶滅危惧Ⅱ類から絶滅危惧ⅠB類にランクアップされた。

環境省の見解によると、日本のライチョウは遺伝的に5つの集団に分化していて、火打山（焼山を含む）の集団はここだけで1つの遺伝的まとまりをもっているのだが、この少数でどうやって集団が維持されているのかは大きな謎である。

他にも火打山のライチョウだけが持つ特徴がいくつかある。火打山のお隣の焼山との間では個体が頻繁に行き来している。他の山岳とは異なり、ハイマツ以外で営巣する例が多く、日本で最も一腹卵数（一回に産む卵の数）が多く8卵の例も

知られている。他の山岳ではオスの数が多いのだが、火打山ではメスの方が多い。また、他の山岳（乗鞍岳）と比較すると、食べている植物の種類や行動パターンが異なり、行動圏の広さが広いようである。

ライチョウは有名な鳥であるので、もう調べることがない位わかっていると思っていたとの声を聞くことが多い。しかし、日本最北限・最少である火打山のライチョウもその生態についてはまだまだ謎が多い。海外では市民科学が盛んで、一般の方々が得たデータが生きものの保全に行かされている。火打山でライチョウを目撃された際にはぜひ詳しい位置（GPS情報があると望ましい）と個体数や雌雄の別等を記録していただくと、彼らの保全に大きく貢献することができる。

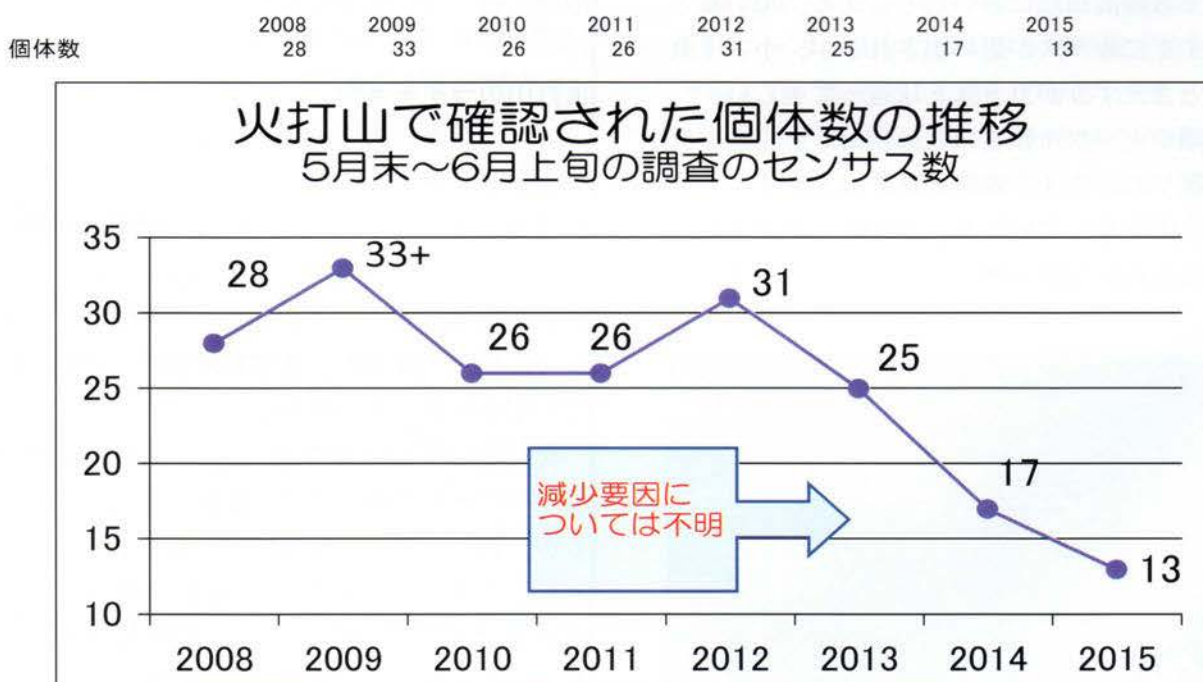


図 7. 火打山で観察されたライチョウの個体数

日本のライチョウは2012年8月に環境省版レッドリストの見直しで絶滅危惧Ⅱ類から絶滅危惧ⅠB類にランクアップされた。

妙高山麓 桶海の鳥

妙高市 後藤 利之

妙高市の南東部に位置する桶海（おけみ）地区は標高 570 ～ 945m、盆地とそれを取り囲む山々で形成されています。北は上越市、東は長野県飯山市、南には斑尾山を望み、西にはなだらかな裾野を広げる妙高山の全容を一望に見渡すことができます。元々農村風景が広がる静かな場所でしたが、バブル期にスキー場やホテルなどのリゾート施設が開発され、現在では自然と人の営みが共存している特徴ある地域となっています（現在の桶海の様子はリゾート施設のホームページで詳細を知ることができます）。



桶海から望む妙高山

桶海ではこれまでに人里から低山の鳥を中心に 18 目 44 科 139 種の野鳥を確認し（表 1、外来種を除く）、多い年には年間 100 種近くの鳥を確認しています。

繁殖期に生息を確認した鳥は 64 種、そのうち繁殖または繁殖している可能性がある種は 54 種になります。ブナなどの森が広がる山間部ではコルリ、クロジ、ノジコなどが繁殖し、キクイタダキが繁殖することもあります。

農村地帯の広がる盆地部ではヒバリ、オオヨシキリなどが繁殖しています。また広域的にヨタカ、フクロウ、ハチクマ、ニュウナイスズメ、サンショウクイなどが見られ、ニュウナイスズメにいたってはスズメが繁殖している盆地部でも普通に繁殖しています。

特筆すべき事例として、1995 年 5 月に民家の軒先でツバメの大陸産亜種のアカハラツバメ（体



桶海付近の地図

下面が淡赤褐色）の雄と亜種ツバメの雌がつがいになって繁殖に成功したことがあり、巣立ちヒナの中には体下面が淡褐色の個体と白い個体がいることを確認したことです。水鳥類ではカルガモ、コチドリ、カワセミなど数種類の繁殖に限られていますが、近年繁殖は確認されていないもののカワウとオオバンが増加傾向が顕著になっています。

また、春と秋の渡りの時期に多くの種が立ち寄ることが確認され、桶海地区が渡りの中継地となっていることが窺えます。マミジロキビタキ（雌）がゴルフ場の落葉広葉樹林に飛来したり、セグロカクウの雄が 3 シーズン飛来したこともあります。

桶海では野鳥以外にもツキノワグマ、カモシカ、ムササビ、リス、テン、モリアオガエル、イモリ、イワナ、ドジョウ、ホタル、ゲンゴロウなど多くの動物が生息し、生き物たちの息遣いを身近に感じることができる自然の残る地域です。

引用文献 上越探鳥の会 会報 No.20



桶海を代表する鳥 ニュウナイスズメ

目	科	No	種名	繁殖	時期	備考欄(出現頻度・状況 場所 1回の出現羽数 等)
キジ目	キジ科	1	ヤマドリ	◎	春～秋	時々。大半が林道部で、ゴルフ場で落鳥記録あり
		2	キジ	◎	春～夏	稀。以前は繁殖していたがゴルフ場拡大で近年は稀
カモ目	カモ科	3	コハクチョウ		2月下旬	2015/2/24グラウンド上空を通過(北へ移動していく声を聞く)
		4	オンドリ		春～秋	時々。貯水池等で1～10数羽
		5	オカヨシガモ		9月下旬	2005/9/23 ゴルフ場旧ショートコース内の池 1羽
		6	ヨシガモ		春、秋	稀。渡りの途中にゴルフ場旧ショートコース内の池 1～2羽
		7	マガモ		春、秋	渡りの途中にゴルフ場の池に時々 1～10数羽
		8	カルガモ	◎	春～初冬	繁殖する個体と通過する個体がいる ほぼ全域
		9	ハシビロガモ		9月下旬～11月下旬	稀。2003年(9/26, 10/7, 11/22)ゴルフ場の池
		10	オナガガモ		10月下旬～11月上旬	2009/11/9 ♀1羽、2013/10/29 ♂1羽 共にゴルフ場の池
		11	コガモ		春、秋	多い。渡りの途中にゴルフ場の池 貯水池等
		12	ホシハジロ		12月上旬	2014/12/2 ゴルフ場旧ショートコース内の池 ♂1羽
		13	キンクロハジロ		春、秋	渡りの途中にゴルフ場の池。貯水池1～数羽
		14	カイツブリ	◎	春～秋	少ない。ゴルフ場旧ショートコース内の池や貯水池
カイツブリ目	カイツブリ科	15	キジバト	○	春～初冬	全域に普通。1～10羽前後
ハト目	ハト科	16	アオバト	△	春～秋	時々。主に林道上本線で、少ない
		17	カワウ		春～秋	2010年春以降1～2羽で時々盆地の池に飛来
カツオドリ目	ウ科	18	ゴイサギ		春～秋	主に夜間。時々盆地で声を聞く
ペリカン目	サギ科	19	ササゴイ		夏～秋	2001、2002、2005年にゴルフ場や集落で、単独
		20	アマサギ		春	渡りの途中の小群を過去に1回。伐採地上空
		21	アオサギ		春～秋(冬)	全域。1～数羽。1月下旬の記録も1回あり
		22	ダイサギ		9月中旬～11月中旬	稀。垂種チュウダイサギ 盆地内の池。J単独
		23	チュウサギ		5月上旬	稀。2007/5/2ゴルフ場の湿地で2羽
		24	バン		秋	稀。ゴルフ場の池で。単独
		25	オオバン		秋	時々。ゴルフ場旧ショートコース内の池で1～3羽
		26	ジュウイチ		5月～夏	時々。主に林道上本線上部で、少ない
		27	ホトトギス	○	5月～夏	全域で普通。林道部では多い
		28	セグロカッコー		5月～6月	稀。過去に3シーズン飛来。集落、林道、ゴルフ場
ツル目	クイナ科	29	ツツドリ	○	春～秋	普通。全域(主に林道部、ゴルフ場)
		30	カッコー		初夏	渡り途中に時折単独で。全域
カッコー目	カッコー科	31	ヨタカ	○	春～夏	少ない。林道、集落、伐採地
アマツバメ目	アマツバメ科	32	ハリオアマツバメ		春～秋	ごく 少ない。時折主に林道上本線
		33	アマツバメ		春～秋	時々。全域。単独～数十羽で飛来
チドリ目	チドリ科	34	イカルチドリ		9月上旬	2002/9/9 ゴルフ場旧ショートコースで早朝に1羽
		35	コチドリ	◎	春～夏	元スキー場駐車場とその周辺、農耕地で1～10数羽
		36	アオシギ		4月下旬	稀。2013/4/27 旧釣り堀の人工池で1羽
		37	チュウジシギ		10月上旬	稀。2002/10/3 農耕地で夕方1羽
		38	タシギ		春	稀。旧釣り堀の人工池で、単独
		39	クサシギ		春、秋	時折。集落を除く盆地の水辺で、1～2羽
		40	イソシギ		春、秋	過去。稀。単独 盆地で数回。県道大鹿桶海線で1回記録
		41	ミサゴ		夏～秋	時折。全域。単独で池等に飛来
		42	ハチクマ	○	初夏～秋	全域。8月頃から集落でも多く出現し、林道では秋に渡り
		43	トビ	△	通年	全域。単独～数羽
タカ目	ミサゴ科	44	ツミ		春～秋	時折。全域。秋には林道で渡る姿も(少数)
		45	ハイタカ		春～秋(冬)	時々。全域。単独で出現
		46	オオタカ		春～秋	稀。全域。単独
		47	サシバ		春～秋	秋の渡りは林道で、秋以外は全域で時々
		48	ノスリ	○	春～秋	全域。(主に林道部、ゴルフ場旧ショートコース)1～2羽
		49	クマタカ		5月中旬	2015/5/13 林道上本線～スキー場ゲレンデダウンヒルで1羽
		50	フクロウ	○	春～秋	主に集落、林道部
		51	アカショウビン		初夏	ごく少ない。渡り途中、主に盆地
		52	カワセミ	◎	春～秋	時々。盆地内の水辺。繁殖は過去に林道
		53	ヤマセミ		春～秋	稀。ゴルフ場に単独
キツツキ目	キツツキ科	54	アリスイ		9月中旬	2014/9/18 農耕地と隣接した低木群落。1羽
		55	コゲラ	○	通年	普通。全域
		56	アカゲラ	◎	通年	普通。全域。過去に集落外れやゴルフ場で繁殖
		57	アオゲラ	○	通年	普通。全域
		58	チョウゲンボウ		春～秋	主にスキー場駐車場とその周辺に時々。単独
ハヤブサ目	ハヤブサ科	59	コチョウゲンボウ		11月中旬	2007/11/14 アパホテル新館～ゴルフ場。1羽
		60	チゴハヤブサ		春、秋	時折。盆地、林道上本線。単独
スズメ目	サンショウクイ科	61	サンショウクイ	○	春～初秋	普通。全域(主に林道部、ゴルフ場)
	カササギヒタキ科	62	サンコウチョウ		春～夏	ごく少ない。渡り途中にゴルフ場、林道上本線
	モズ科	63	モズ	◎	春～晩秋(冬)	普通。全域。1～2羽
		64	カケス	○	通年	普通。全域。(秋～春は盆地で増える)
	カラス科	65	オナガ		8月中旬	2015/8/16 集落へ単独で飛来。
		66	ホシガラス		9月中旬	2010/9/14 林道上本線。1羽
		67	ハシボソガラス	○	通年	普通。全域。秋～冬は集落付近で数百羽の群(ねぐら)形成
		68	ハシブトガラス	○	通年	普通。全域。秋～冬は集落付近で数百羽の群(ねぐら)形成
	キクイタダキ科	69	キクイタダキ	◎	秋～春	主に盆地、林道部。林道部で夏季の記録あり
	シジュウカラ科	70	コガラ	○	通年	主に林道部。秋～春は盆地でも見られる。
		71	ヤマガラ	◎	通年	普通。全域
		72	ヒガラ	○	通年	普通。全域(主に林道部)
		73	シジュウカラ	◎	通年	普通。全域(主に集落、ゴルフ場、林道部)
		74	ヒバリ	◎	春～秋	ゴルフ場旧ショートコース、スキー場とその駐車場。1～3羽
	ツバメ科	75	ツバメ	◎	春～秋	普通。全域。秋は盆地で渡りが見られることもある。
			(アカハラツバメ)	◎	5月～6月	稀。1999年5月に集落で亜種ツバメと繁殖成功

目	科	No	種名	繁殖	時期	備考欄(出現頻度・状況 場所 1回の出現羽数 等)
		76	イワツバメ	◎	春～秋	普通。全域(ゴルフ場クラブハウスではコロニー形成)
	ヒヨドリ科	77	ヒヨドリ	○	通年	普通。全域。春と秋は渡りも見られる
	ウグイス科	78	ウグイス	○	春～秋	普通。全域。林道部では多い
	ウグイス科	79	ヤブサメ	○	春～秋	普通。林道部、桶海坂
	エナガ科	80	エナガ	○	通年	普通。全域
	ムシクイ科	81	オオムシクイ		5月～6月	林道上樽本線、ゴルフ場(渡り途中)
		82	メボソムシクイ		春、秋	時折。林道部、ゴルフ場(渡り途中)
		83	エゾムシクイ		春、秋	時々。ほぼ全域(主に林道部)。渡り途中
		84	センダイムシクイ	○	春～秋	ほぼ全域に渡り途中で立ち寄る他、夏季に局地的に生息
	メジロ科	85	メジロ	○	春～秋(冬)	普通。全域。1～数羽
	センニュウ科	86	シマセンニュウ		6月上旬	稀。2010/6/3 集落外れのススキ原で1羽
		87	エゾセンニュウ		6月下旬	稀。2007/6/24 林道上本樽上部で1羽
	ヨシキリ科	88	オオヨシキリ	○	初夏～秋	ゴルフ場の一部 集落・農耕地の一部
		89	コヨシキリ		9月下旬	2014/9/26。ゴルフ場旧ショートコースの草地でさえざり
	レンジャク科	90	キレンジャク		秋～春	稀。ほぼ全域。1～数羽
		91	ヒレンジャク		秋～初夏	時折。ほぼ全域。1～数羽
	ゴジュウカラ科	92	ゴジュウカラ	◎	通年	普通。全域(主に林道部、ゴルフ場)
	キバシリ科	93	キバシリ		秋～春	時折。集落で1～2羽。ごく少ない
	ミノサザイ科	94	ミノサザイ	○	通年	普通。主に林道部。冬期は集落にも出現
	ムクドリ科	95	ムクドリ	◎	春～秋(冬)	普通。全域(主に盆地)夏にも一時期いなくなる
		96	コムクドリ		春～夏	主に盆地。渡り途中に1～2羽
	カワガラス科	97	カワガラス	△	春～秋(冬)	時々。主に貯水池。単独
	ヒタキ科	98	マミジロ		秋	稀。渡り途中に林道上樽本線。単独
		99	トラツグミ		春～夏(冬)	時々。主に林道部、集落
		100	クロツグミ	◎	春～秋	普通。全域(主に林道部、スキー場、集落)
		101	マミチャジナイ		春、秋	時々。主に集落、林道。渡り途中
		102	シロハラ		秋～春	主に集落、林道。冬は年による
		103	アカハラ		春、秋	主に集落、林道。近年はごく少ない
		104	ツグミ		秋～春	主に集落、ゴルフ場、林道。冬は年による
			(ハチジョウツグミ)		秋～春	稀。集落。単独(亜種ツグミの群れに混じる)
		105	コマドリ		春	渡り途中、桶海坂、県道大鹿桶海線
		106	コルリ	○	春～夏	普通。主に林道上樽本線、スキー場
		107	ルリビタキ		春、秋	少ない。ほぼ全域。渡り途中に時々
		108	ジョウビタキ		春、秋、(冬)	少ない。主に盆地。冬は前に集落
		109	ノビタキ		春、秋	渡り途中に、主にスキー場駐車場とその周辺。1～10数羽
		110	エゾビタキ		春、秋	渡り途中に、林道部。1～数羽
		111	サメビタキ		春、秋	渡り途中に、林道部。1～数羽
		112	コサメビタキ	◎	春～秋	春はほぼ全域。夏～秋は主に林道部、ゴルフ場
		113	マミジロキビタキ		5月上旬	2003/5/1 ゴルフ場の落葉広葉樹林。♀1羽
		114	キビタキ	◎	春～秋	普通。全域(主に林道部、ゴルフ場)
	スズメ科	115	オオルリ	○	春～秋	やや少ない。全域(主に林道部)
		116	ニューナイスズメ	◎	春～秋	普通。全域(主に林道部、ゴルフ場、スキー場)
		117	スズメ	◎	通年	主に集落、農耕地。近年減少傾向にある
	セキレイ科	118	キセキレイ	◎	春～秋	普通。全域(主に集落、農耕地、林道部)
		119	ハクセキレイ	○	春～秋(冬)	少ない。主に盆地。冬は時々
		120	セグロセキレイ	◎	春～秋(冬)	少ない。主に集落。農耕地とその周辺。冬は時々
		121	ビンズイ		春、秋	渡り途中。全域。1～数羽
		122	タヒバリ		春、秋	稀。集落、グラウンド。単独
	アトリ科	123	アトリ		秋～春	全域。春は年により数百羽単位の大群が出現
		124	カワラヒワ	◎	春～秋(冬)	普通。全域
			(オオカワラヒワ)		春、秋(冬)	渡り途中。全域。群れでの出現が多い
		125	マヒワ		秋～春	全域。1～数百羽の群れ
		126	ベニヒワ		春、秋	稀。渡り途中。林道上本線、ゴルフ場
		127	ハギマシコ		冬～春	稀。2010～11年冬は1～数羽で出現
		128	ベニマシコ		春、秋	全域。渡り途中に時々。1～数羽 2羽
		129	イスカ		冬～初夏	稀。林道、集落で小群。2014年は当たり年
		130	ウソ		秋～春	主に林道部。集落。1～数羽
			(アカウソ)		冬	時折。冬に集落。1～数羽
		131	シメ		春、秋	渡り途中。集落、ゴルフ場。1～数羽
	ホオジロ科	132	イカル	○	通年	林道部では普通。全域。1～10数羽
		133	ホオジロ	◎	春～秋	普通。全域。1～数羽
		134	ホオアカ		4月下旬、10月下旬	2007/10/28 農耕地で1羽。2015/4/23 ゴルフ場み1羽
		135	カシラダカ		春、秋	普通。全域。渡り途中に1～数十羽
		136	ミヤマホオジロ		春、秋	時折。ほぼ全域。渡り途中に1～数十羽
		137	ノジコ	◎	春～秋	少ない。主に林道部(春と秋には盆地にも出現)
		138	アオジ		春(初夏)、秋(冬)	全域。渡り途中に1～数羽。稀に冬
		139	クロジ	○	春～秋	主に林道上樽本線、スキー場。1～数羽
ハト	ハト	外来種	ドバト		春～秋	稀。集落に1羽で飛来
スズメ	チメドリ	外来種	ガビチョウ		8月下旬	2013/8/27 集落と林道上樽本線で声を記録
	ムシクイ	外来種	アムールムシクイ		6月中旬	2011/6/16 林道大谷桶海線で本種のさえずりに似た声を聞くが未断定

1. このリストは妙高市～桶海編～に添付した地図の赤線内で出現した鳥類記録である。桶海盆地と隣接する山々、その中にあるゴルフ場、スキー場内の一部を含み、2015年9月10日現在、後藤が観察記録したものと、探鳥の会で行った3回の探鳥会出現種である。
2. 繁殖記号 ◎ : 繁殖したことがある ○ : 繁殖が推測される △ : 繁殖は微妙
3. 時期欄は記録した季節や月を表しているが、出現頻度は1回～普通まで様々な物が含まれ、全て同じ頻度ではない。
4. 時期欄の()内は過去には他にそういう記録があるという意味である。

新潟県野鳥観察図鑑 vol.6

オオルリ (*Cyanoptila cyanomelana*) 英名: Blue-and-white Flycatcher

1. 新潟県のオオルリ

夏鳥として佐渡島、粟島を含む県内各地の山地や溪谷に飛来し、斜面の岩崖などに巣を作り繁殖する。主に昆虫類を捕食する。春と秋の渡りの時期には平野部に飛来し、林や公園でも観察される(妙高市の鳥)。



写真3 繁殖期の森林林縁部でさえずるオス

2. 春の渡り

4月中旬から5月初旬にかけて渡りの途中に平野部の公園や海岸林などに立ち寄り休息する。花が散り若葉が芽吹き始めたサクラの木などに発生する青虫や飛翔性の昆虫類を捕食する様子を観察することができる(写真1)。

メスはオリーブ色で目立たない体色をしており樹木の茂った繁殖地では見つけにくいいため、渡りの途中が観察の好機である(写真2)。



写真1 桜の木で鱗翅目の幼虫を捕食する成鳥(オス)



写真4 秋に観察されるオオルリ幼鳥(オス)

3. 繁殖期

主に溪流や湖畔などを望む山地森林の林縁部に渡来し、岩崖にコケで巣を作り繁殖する。渡来当初は溪流沿いの芽吹き始めた樹木の枝先でなわばりをめぐってオス同士が追いかけ合う様子を観察することができる。5月から6月にかけて林縁部の高い樹木の枝先など目立つ場所(ソングポスト)で囀るオスの姿を見つけることができる(写真3)。

4. 秋の渡り

9月の渡り時期にも平野部の公園などに立ち寄る。秋は木々の葉がまだ茂っているため春に比べて見つけにくいですが、その年に巣立った幼鳥を観察することができる(写真4)。

(写真 岡田成弘)



写真2 メスは渡りの季節に市街地でも見る機会が多い。



オオハム

初認日： 3月18日

最終確認日： 5月19日

撮影場所：鳥屋野潟

撮影者：浅野 涼太

海上や港湾で見かけるが、珍しく湖面や水路を泳ぎ魚を捕食していました。約2か月滞在しました。



カラシラサギ

撮影日時：6月29日

撮影場所：関川の河口付近（上越市）

発見者：南波 明夫

撮影者：金子 俊彦

コサギより少し大きめの美しいサギ、脚の色がポイントです。



カッコウ

撮影日時：6月19日

撮影場所：尾瀬 魚沼市

撮影者：南雲 敏夫

この日はカッコウがよく鳴いて、林の縁で待っていると近くにとまってくれました。



ハヤブサをモビングするツバメ

撮影日時：9月14日

撮影場所：魚野川

撮影者：桑原 哲哉

普段は捕食される側のツバメたちが、この時はハヤブサに果敢に立ち向かっていきました。



アリスイ

撮影日時：4月24日

撮影場所：銀山平（魚沼市）

撮影者：桑原 哲哉

旅鳥として主に平野部を通過するキツツキ。わずかに雪の消えた路面でエサをさがしていました。春の渡りシーズン。雪の残る銀山平で。

日本野鳥の会の活動と役員組織について

日本野鳥の会新潟県は6月に総会を開き、今年度の活動を進めています。

日本野鳥の会の本部も新役員体制で本年度の活動がスタートしています。「野鳥」誌やホームページ等をご覧になった会員の皆さんは、既にご承知のことと思います。石部久会長が評議員として任に着了しましたので、ここに紹介したいと思います。

日本野鳥の会会長等・評議員・役員

2015. 6. 15現在(敬称略)

会長、副会長(五十音順)

会 長: 柳 生 博(評議員長)
副 会 長: 上田 恵介(評議員)
佐藤 仁志(理事長)



評議員(五十音順)

評議員長: 柳 生 博(俳優)
評 議 員: 石井 隆(日本野鳥の会神奈川県支部副支部長)
石部 久(日本野鳥の会新潟県会長)
上田 恵介(立教大学教授)
上原 治也(三菱UFJ信託銀行株式会社最高顧問)
北白川道久(一般社会法人霞会館理事長)
原 剛(早稲田環境塾塾長)
丸山 聡子(日本野鳥の会ひょうご代表)

理事(五十音順)

理 事 長: 佐藤 仁志(日本野鳥の会島根県支部副支部長)
副理事長: 吉田 新(音楽コーディネーター)
常務理事: 遠藤 孝一(日本野鳥の会栃木副代表)
佐久間 仁(日本野鳥の会佐賀県支部副支部長)
理 事: 安西 英明(公益財団法人日本野鳥の会主席研究員)
狩野 清貴(NPO自然観察指導員京都連絡会元代表)
松田 道生 フリーランス(執筆業等)
見田 元(日本調剤株式会社常務取締役)

監事(五十音順)

監 事: 上田 健(トコロジストよこはま・あさひ代表)
曾我 千文(東京都職員)

「全国鳥類繁殖分布状況調査」 調査協力についてのお願い

日本野鳥の会では、全国的な鳥類の繁殖状況を把握するための調査として、環境省の委託を受けて、1974年から78年にかけて第2回自然環境保全基礎調査、1997年から2002年にかけて同第6回調査を行ってきました。

この2回の調査結果から、初めて全国的な鳥類の分布の比較が可能となりました。その結果、環境省版レッドリストへヨタカやアカモズが掲載され、また、日本の生物多様性評価にも調査結果が広く活用されるなど、大きな成果を上げることができました。

近年では、シカの増加に伴って藪に住む鳥類におよぼす影響、外来種の分布拡大、気候変動による分布の変化や草原性の鳥類の減少など、鳥類やそれを取り巻く環境に様々な変化が刻々と進んでいる可能性もあります。

調査は、ラインセンサスだけでも全国で約2,300コース、県内では65カ所の調査地を調べる予定です。調査地に生息している(佐渡13ヶ所)鳥の種類や生息数を調べ、分布図を作成します。会員の皆さん、全国の他支部の仲間と一緒に調査活動の参加・協力してみませんか。よろしくお願いいたします。



樹木の生長と共に増加している樹洞性の鳥 キビタキ

銀山平探鳥会 ～柳瀬昭彦先生を想う～

平成 27 年 日本野鳥の会新潟県 銀山平探鳥会

佐 藤 武

平成 27 年度の日本野鳥の会新潟県の総会及び探鳥会が、6 月 6～7 日に銀山平で行われました。総会研修会では、石部久会長から「奥只見山系と鳥類群集」について、桑原和寿氏から「魚沼市で観察された鳥類」について、それぞれ興味深い話を聞くことができました。

魚沼市は河川・溪流の鳥から高山に至るまで、多様な野鳥たちとの出会いを楽しむことができます。魚沼市の野鳥リスト（魚沼市鳥類目録）では、204 種が記録されています。

私は奥只見 銀山平の自然に触れると柳瀬昭彦先生を思い出します。今年 4 月、日本野鳥の会新潟県の役員を長年に渡り務められ、小出野鳥の会会長である柳瀬昭彦先生が逝去されました。魚沼市の野鳥リスト（魚沼市鳥類目録）は、柳瀬先生が 1972 年から観察・調査を続け、まとめたものです。

柳瀬先生は私の高校時代の恩師でもあり、野鳥観察を始めて 30 年余りの私にとっても大きな存在でした。

柳瀬先生とは、魚沼市の各鳥獣保護区設定の調査に同行させていただきました。越後駒ヶ岳の暑い夏山登山。銀山平を眼下に見ながらクロジ、コルリの声に励まされ、足元の沢筋から聞こえるルリビタキの声に一瞬の涼を感じ、イヌワシの出現を期待し夏未だ雪残る山頂を目指す登山は、柳瀬先生にとっても好まれた山行でした。

柳瀬先生夫妻とはいろんな所に探鳥に出かけましたが、特に奥只見には良く一緒に行きました。毎年春には、小出野鳥の会恒例のコノハズクを聞く会。また、晩秋の茅野で出会ったベニマシコの群れに皆で感激したことを覚えています。

昨年春、柳瀬先生は奥様に車椅子を押してもらって銀山平の散策をしました。後日、届けられた葉書の一節を紹介したいと思います。

「とにかく夢の様な時間でした。ラショウモンカズラ、シラネアオイの群落、銀山平ならではの見事さ。細君はニュウナイスズメにかなり酔った

様です。」

「小出野鳥の会だより」が届かなくなって半年。魚沼市の探鳥会では、柳瀬先生が初めてフィールドスコープで見たキセキレイの美しさに心惹かれたことや、春の探鳥会の始めには、いつも「幸せの青い鳥オオルリを見つけましょう」と言っていた声が今も耳に残ります。

柳瀬昭彦先生なくしては、魚沼でのバードウォチングという文化は育ちませんでした。今では若い指導者も育ち、安心されて旅立たれたと思います。ご冥福をお祈り申し上げます。



残雪の銀山平から中荒沢岳を見る



朝霧の晴れた、銀山平 越後駒ヶ岳の雄大な風景



平成 27 年 日本野鳥の会新潟県 銀山平探鳥会の風景

雪国の鳥をたずねて

破間川水系 ～広神ダム・藪神ダム～

1 はじめに

魚沼市は河川・溪流の鳥から亜高山帯の鳥まで206種の野鳥が観察されている。今回はアクセスが良く、探鳥地として楽しめる、魚野川と合流する破間川(あぶるまがわ)水系の2つのダムを紹介する。

2 広神ダム

破間川の支流である和田川にある2011年竣工の新しいダムで、国道252号線から352号線に入り3km程の緩い登り坂の先にある。0.65km²のダム湖にはカモ類などの冬鳥が飛来するが、残念ながら冬期のダム周辺は3mを超す雪に覆われてしまう。

春に雪がなくなる4月下旬になるとダム堤頂から左右の傾斜の急斜面にオオルリ、サンショウクイなどの夏鳥の姿や声。遠くの尾根には渡って来たサシバ、ハチクマなどが飛ぶ様子を楽しめる。雪解けが早ければ湖面にコガモなど北帰の遅いカモ類を見ることができる。

ダムの下流にある緑地公園からダムへ向かって歩くのもおすすめ探鳥コースで、ジュウイチ、カッコウ、アカショウビン、サンコウチョウ、ノジコなど山の鳥と水辺の鳥が待っている。人里からすぐ近くとは思えない豊かな自然に触れることができる場所である。



藪神ダム 大倉沢大橋から下流方向

3 藪神ダム

広神ダムが雪解けまで近寄れないのに対して冬のカモ類も観察可能なダムが破間川の少し上流にある藪神ダムである。

国道252号線の大倉沢付近を東に進むとすぐに破間川をせき止めた細長いダム湖が見える。ダム湖中央付近を県道70号線の大倉沢大橋が横断していて橋の歩道から湖面や両脇の林がとても見やすい。

春にオシドリを見ることが多く、遅くまで残るキンクロハジロなどカモ類、張り出した枝にとまるカワセミなどが観察できる。また、ダム東側の山の稜線には枯れたマツなどが点々とあり、カモ類を狙うワシ・タカ類、運が良ければ大きなコイを食べるミサゴも見ることができる。

(魚沼市 桑原和寿)



コイを捕らえたミサゴ 藪神ダム



大倉沢大橋から良く観察できるオシドリ

発行 2015年10月15日 No.80

発行人 石部 久 編集者 小林成光、千葉 晃

日本野鳥の会新潟県

事務局 〒950-0941 新潟市中央区女池3丁目13番25号

TEL 025-285-2405 本間由紀子方 〈振替口座〉00610-1-6002